

東京育成園創立者

北川波津女史の伝記

三年 鈴木 閑子

宇都宮万代

長友 米子

富塚 陽子

四山 洋子 西川 敦子

豊田美智子 前沢久美子

花形もと子 宮沢、尚子

山岸 ひろ

(一)前がき

現在尙慈善的色彩をおびていると云われる日本の社会事業の中で、明治時代より継統されて居り、しかも近代社会事業の中に中樞的地位を示めしている一つに東京育成園がある。

(1)北川波津女史がこの園の設立者であること。

(2)一般女性が社会的地位に恵まれていない、即ち女性全体が一般に認識されなかつた明治時代において婦人社会事業家として代表的な人物であつたこと。

(3)女史の生涯及びその事蹟が知られていないこと。

以上の三点に女史を探り上げた理由がある。

女史の人生及び人格を通して、(1)社会事業をどう云う目的と思想で追求して行つたか、(2)その為にはどの様な人生を送らねばならなかつたか、(3)婦人としてどういふ問題があつたか、を基調として考察していく事にする。本稿は、(1)社会事業に半生を捧げた人々、(大正十五年慶福会発行)(2)社会事業功勞者事蹟(昭和四年社会局発行)、(3)東京育成園(明治四〇年東京育成園発行)、(4)近代社会事業の歴史(昭和二七年吉田久一著福祉春秋社発行)を参考書とし、松島正徳氏(現在東京育成園園長)、北川北仙

氏(女史の甥二代目北川水戸市在住)桑

野千代子氏(姪 世田谷区太平堂三八四)、

の口述によるものである。だが女史の近親者、事業の援助者、又その他の助言に有力な人々は皆故人になり、その為資料蒐集には非常な困難があつたことを付け加えたい。

その他新聞、六合雑誌、水戸市役所戸籍水戸市訪問の資料による。

(二)出 生

女史は三百年の鎮国政策破綻の緒たる日

本修好家約締結の安政五年(一八五八年)

一月九日茨城県水戸市市下市曲尺手町に、父

北川白駒氏、母はなの第四女、七人兄妹の

末子として生れた。

父はもと岡山藩士で、北川新左衛門輝虎と云い、直情径行の人であつたため、お家騒動により岡山藩を追われ水戸に移つた。水戸に於ける氏の生活は、趣味としての狂歌、狂詩、易学等によつて営まれたと推察される。

母はなほ、岡山藩の江戸屋敷にのぼつていた富山の人である。(北仙氏談)

当時の水戸の風潮は、諸大名中最も勢望のあつかつた徳川齋昭が、幕府の顧問となつて阿辺正弘を助け、国内外の複雑な形勢に対処して居た等の為、更に光圀以来の伝統とあいまつて尊王思想が親藩中では最も盛んであつた。即ち水戸藩が攘夷論を唱え、幕府の軟弱政策に憤激していた時代である。

(4) 幼少時代

浪人ぐらしをし、二人して比較的自由な生活を築んでいたと云う両親は、子供達には左程厳しいことはなく、教育に対しても当時の常識以上には関心を持たなかつたようである。

女史の少女時代、水戸には文武奨励の氣風が残つて居り、士の子弟はもとより、町人

の子弟迄私塾に通う者が多かつた。女史はすぐ上の兄留之助や、小姉達と同じ町内の浪士小井戸、其之助の家へ手習ひに通つた。多芸の父に似て女史は器用な子供であり筆跡は非常に美しく、当時の女子一般の技芸とする機織に於ては、得意の腕をもち殆ど自分の着物は自分で織つたものであると云われる。そして女史は友人間兄姉間に於てさえも嫉妬される程美貌の持主であつた。更に小さい時から非常に勝氣の性格を持つていた。(北川北仙氏口述による)

(4) 青年時代及び結婚生活

和漢学や書道、裁縫を一応身につけて成人した女史は、一九才の時、以前から一面識あつた水戸の青年小坂熊吉氏が医者になつたといふ云う望みが達せられないうることを知ると、男勝りの気性をもつて家人や周囲の人達の反対を押し切つて結婚し、東京へ出、針の貸仕事や他人の洗濯仕事等をして小坂氏にみつぎ、遂に彼の望みを達成させた。しかし、この結婚は「女大学」いまだ信奉される封建遺風の根強い當時に於ての恋愛結婚であり、又近親者達からはもう少し財産のある人こそ望ましかつたといつ

た考えて祝福されはしなかつた。その後小坂氏は名古屋のある相当に大きな会社の嘱託医として就任し、かなり豊かな二人の結婚生活は二十年間に渡つて続けられた。この間、近親者の反対を押し切つての結婚であつた為、家人兄姉との交際は殆ど行われなかつた。従つて女史の生活状態、小坂氏の性格等一齋知ることが出来ず判るのは只子供が無かつたと云うことである。

尙この青年時代に女史は、ギリシヤ正教会ニコライ宗の信者となつて居る。女史が如何にしてニコライ宗を信仰するに至つたかと云うことは、松島正儀氏の口述によれば北海道——函館——仙台を経て東京へと伝道に旅されたギリシヤ、カトリック、ニコライ神父の水戸通過の折に、神父の敬虔さ偉大さに触れてキリスト教に帰依したものであると云われ、又桑野千代子氏の口述によれば東京であるとも云われている。又ニコライ神父の足跡を辿つても、何時、何処でニコライ宗に帰依したか明らかでない。一方女史の口述による「育成園」によれば、栃木県の片田舎に於て、ある牧

師によりキリスト教に導かれたと述べられて居り、それが、女史が熱心なクリスチャンとして信仰の生涯を送つた大きな動機であつたと述べられてゐる。

明治二十八年、三十八才の時、離婚と云う事件が起る。これについてははつきりした原因は一つもつきとめることが出来なかつた。一応四つの原因が考えられる。

一、小坂氏との間に子供がなかつたこと（松島氏談）二、女史がキリスト者として夫と宗教的違ひがあつたこと 三、平凡な結婚生活よりもつと自覚のある生活がしたかつたこと 四、夫に女史以外の女性が現われたこと（二代目北仙氏談）以上であるが、いずれにしても重点を置くには根拠が薄い。

離婚事件について唯一つ確実に云えることは、二人が別れる時に著まで二つに分けた（北仙氏談）と云えるほど財産を二分したことである。これは後に女史が事業をはじめめる資金となつた。

（四）東京孤児院設立

夫と離別した後、実家に寄宿していたが栃木県の片田舎に於て娼妓等に触れて、そ

の原因が親に別れ、特に母親がない女の干渉を引きとつて、母親となり、友となりたといふ考えていた。又日頃から神様のために何か尽したいとも考えていた。時あたかも三陸大海嘯のために孤児となつた児童をみて、前後のわきまもなく彼の母になつたと女史自身これを始める動機として述べている。

女史は男女二十六人を養つていた有志者が止むをえず事業を中止しなければならぬのを目撃し、明治三十年の夏、その児童を引きとつたのである。

自分の干とした子供を養うのに、他より援助を仰ぐ必要はない、むしろこれを受けのるのを己れの恥と考へ、二カ年間一人で二十六名を養つていた。しかし精神的にも肉体的にも多大の困難に遭遇し遂に、世の中の助力を仰がねばならぬ事態となり明治三十二年四月十五日牛込区三〇七五に東京孤児院の設立を見るに至つたのである。

女史は籍のない子供達に北川の姓を与へるほど、家庭を作らうと云つ意志であつた故に東京孤児院の設立にあつて「私の長年の宿望も茲に水の泡と消え失せてしまつ

た」とその心境を述べている。

（四）設立後「窮乏時代」

事實上、東京孤児院として世の同情を求めたものの、非常に物価の高かつたこの時代に窮乏状態は益々激しくなるばかりであつた。女史は、或る人間以上の偉大なるものの存在を信じ、これもみな神の摂理であるとして秘かに望みを抱いていた。「止むをえず一時は子供と別れることを考えたが子供達の無限の愛に励まされ、仮りに死すとも別れまいと決心した。」と当時の有様を神への感謝をもつてそう述べている。この窮乏時代に自ら病に臥していたが、自営自活せねばならず、病を押して院の年長児と納豆売りに出、漸く其の日の生計を立てた程である。教育に主眼点を置いた女史の正義に反して、納豆売りが金銭のことで教育目的上問題が生じ、三十三年二月には児童の行商を廃し、その他の事業を行なつてみたが、いずれも失敗、遂に機織のみに断念した。

又三十三年四月「東京孤児院月報」を発刊したが、印刷のみで發送の工面さえも出来ず寄附を仰がねばならなかつたのであ

る。尙ここで注目すべきことは、翌年(三十三年二月)賛助員であつた榎木頼千代氏が深い意を抱いて入院され、この時女史は初めての同志を得たのであつた。

「成育時代」

その後、独立を持つて事業は出来るものではなく、世の人の同情を仰いで院の拡張を計らねばと、一つの希望と自信を得、遊説の旅に出て賛助員の勧誘に尽した。こうして三十六年青山南町六丁目の新築にこぎつけたのである。

明治三十七年第一回戦時特別事業として臨時預児部を開設、日露出征軍人遺族子弟の救護に当り、続いて明治三十九年東北凶兇地方窮児救護、明治四十一年九月千葉県安房郡北条町に支部を開設明治四十二年三月千葉県、茨城県に遭難者遺族子弟第三回臨時預児部、と次々と各地に開設された。これは院の經營がこの間如何に組織的に事業を進めていつたかを物語るものであつて、預児部の規則のもとに収容されたのである。

この他、注目すべきことは、四十年孤児院を東京育成園と改称して、当時の社会事

業界の中で特性を示したことであつた。

女史の意とするところは、孤児の二字は児童の教育上の弊害を及ぼすものであり、且つ女史の精神を發揮し、目的を貫徹する上に、大障害のあるものとして、家庭的意味のある名称に変更する必要を確信してのことだつたのである。当時の慈善的思潮の中で「孤児」の言葉を否定したと云うことは、女史の博愛の精神と、園の主義、方針を明確にする一大改革であつたことを物語っている。尙「東京育成園」の園名の命名者は故家庭学校長留岡幸助氏であり、両施設の關係は今日も深く保たれている。四十年財団法人としての基礎を確立、公的財産の性格をもたせた。

(4) 育成園の目的及び特質

育成園の目的は単なる孤児のあずかり所ではなく、女史が「必ず立派な子供にして見せる」といつた言葉(松島氏談)にある如く、女史は宗教的精神を持つて児童の精神的救済、道德的救済を目的としたのである。しかし宗教的な教育の爲にしたのではなく女史の世俗的な信念でしたわけなのである。又教育は一様にするのではなく、子

供一人一人のむきむきによつて教育し、女史は鋭い洞察力によつてその弊害もなく、その決意を貫き通している。特質として、(1)家庭であること、(2)援助者に対して親近感を持つていた事、(3)単なる孤児の爲の施設ではなく苦学生^{くがくせい}の塾でもあつた事、(4)出身者を園の従業員となしてゐる点等が上げられるであらう。

(5) 社会的反響

先ず女史の肉親の反響はどのようなものであつたか、水戸の兄北仙氏は、女史の社会を相手にするといつた態度に対して、家庭をかえり見ない女にはあるまじきと云つた考えから、当初はあまり賛成を示していない。が育成園の実績が上るに従ひ、女史に対して尊敬の念を表わし、その女の子を手伝いがてら見習ひ奉公にあげてゐる。(桑野千代子氏談)これは女史の教育に対する信頼をあらわすものであらう。

社会一般には、女史がかつて医者^{いしや}の妻であり、現在は単独で孤児を養つてゐると云う事と、東京にはこのような施設が、東京市養育院、福田会のほかは活動を示してゐなかつたので、当時のインテリの注目を引ひいてゐる。特に文士連の園に対する直接、間接の援助は、非常に園の発展に大き

な力となつた。この文士達の力により、名士の夫人、宮内省女官の人々に至る迄、多くの援助の手をのべている。明治四十年発行、「育成園」には大隈重信氏が序文を書いて次のように激励している。「之吾が民間篤志者の手によりて、創設されたる慈善的設備に期待すること、甚だ大なる。所以也。今、東京育成園の事業及其成績を觀て、比感甚だ功他。卷頭に題して特に當事者の奮勵を望む。」

六合雜誌（明治三十五年二月十五日第二百五十四号）には育成園訪問記が中央公論（明治三十七年三月一日発行、第十九号）には關の特質等美点を上げ、賞讃している。更に女鑑（明治三十七年八月発行第十四号第九号）電報新聞（明治三十八年二月）に院の記事が報ぜられている。いずれも院の家庭的な養育方針に対して感動の情を示している。

（四）後援者

前文で述べたように、育成園の特徴であつた文士達、小林一郎、滝村斐男、白柳秀

湖、更に徳富蘇峯氏の間接的文章による後援があつた。（松島氏談）この人々との結びつきに対してはその端緒がどこにあつたかは、さだかではないが前二者は非常に援助している。

これらの人々の活躍により、工学士、工学博士、文学博士夫人と云つた人々、宮中の女官に至る婦人の働きは、女史が「院の今日あるは、当時比の優秀なる方々の尽力によるもの」と感謝しているように精神的に経済的に尽している。慈善音楽会を催したり、東京のみならず大阪、京都に至る迄各地に一口十銭の賛助者を拡大している。さらにつけ加えれば、院児とこの賛助者との關係は、恵むもの、恵まれるものとの關係ではなく、院の親類であるとし、伯父さん、伯母さんと呼ばして居た。

（四）晩年

こうして、どこ迄も園児教育に主眼点を置き、その才能に応じて自由な研究の便を取つたので、園は医学界、産業界、其の他社会の指導的有数な人物を出すに至つた。園児の縁組等を通して、女史の教育が、如何に社会的に信頼を得ていたものであつたかが伺われる。

かくの如き園の事業に対し、大正十三年

東宮殿下御慶事に際しては、御紋章付銀盃並びに御下賜金を拝受し、大正十五年十月には三十年以上勤続社会事業功勞者として、恩賜財団慶福会総裁閑院宮殿下より表彰せられ、御紋章付置時計を下賜せられ、かつ又終身年金を贈与せらるる事になつた。猶我が国社会事業功勞者中の一人として、撰政宮殿下に拝謁仰付せらるるの光榮を重ね、更に昭和三年十一月即位の大孔を行わせらるるに至り、社会事業に關する功績を認められ、藍綬褒章を与えられるに至つたのである。

この間、女史は極めて健康であつたが、七十才近くに、背中の「よう」の爲に大病に煩わされたこともあつた。其の後健康であつたが昭和七年六十五才の秋から神経痛リニーマチスで四肢不随となり、病床にいつたので、翌年実務を松島正儀氏に引き継いだ。

尙昭和二年頃より三回に渡つて養子或いは養女を入れたが、いずれも失敗に終つたのであつた。およそ六年間の病床生活の後、老衰し現在の育成園に於て他界の人となつたのである。病床中教会からの見舞もあつたので、女史の信仰的態度は一層深まつた。

女史自らの希みて、葬儀はギリシヤ正教

会の様式をもつて行われ、その翌年、園児等と共の育成園立の墓碑が多摩墓地に建立された。

出むすび

はじめに述べたように北川波津女史の伝記は、かつて書かれたことがなく、正確な資料がないので離婚の原因等にも諸論が語られ、事実を明確にするのは非常に困難であつた。女史の性格については知る人がすべて強い性格であつたと云う。幼い時より兄弟ともあまり合入れない強い性格で、さらに結婚生活破綻を契機として、人生に対してみずからの信念を決して曲げない自己に徹する性格が増されたと思われる。又コレクションとして頭を上げてゐる馬の置物をあつめていたといわれ(松島氏談)馬が真直に目標に向かい、ひたすらにすすむ姿は女史の人生態度といみじくも一致してゐたと云えよう。

女史のキリスト者としての信仰は、意志をさらに信念となさしめ、神に尽したいと云う気持から親のない恵まれない子供のために生涯を捧げたいと云う純粹な信仰心であつた。

明治の女性として、思想的な教育を受けなかつた女史は、社会事業的、慈善事業的

社会意識というよりは、本能的な母性的愛情からの社会意識でしかなかつたのではなからうか。又義務教育制度その他ある程度産業革命後の社会にあつては進歩した児童保護制度があつたが、救貧法は抑止の傾向にあり、社会事業にしても意識的に起こされたと云うよりは日本の特徴である経済革命と關係なく、天災地変による必然的、応急処置的なものであつた。

東京育成園にしても將にその枠内にはまるものではあるが、しかし宗教的精神をもつて、精神的、道徳的救済をなし、孤児として個性教育に主眼点をおき、しかも一方では、決してキリスト教をおしつけなかつた女史の精神、愛憎が優秀なる出身者を統出させたのであろう。強い性格の所持者ではあるが、決して人にそれをおしつけず、よく人の云う事を聞き、それをおしすすめる熱情と実行力と、その故により後援者後継者を得た事、そして女史の後援者である人々が財力よりも精神的援助をおしまなかつたインテリ層であり、よい忠告をなし、女史の欠点をカバーして行つた事で、園を今日まで存続させ、先驅的社会事業が、一代で消滅した例が極めて多中に組織的に

且つ眞の児童施設として確実な歩みをして来た。これは日本の社会事業史上たしかに特異な一例と云えよう。

女史の事業が、社会的にも認められ、且つ内容も充実して行き、今日尙も女史の意志が生きて生きと伝えられてゐると云う点で女史の努力それに加えて、幸運に恵まれた女史の背景を見逃がしてはならない。

尙紙数が制限された為、資料を充分にもり込む事が出来なかつたのが残念である。

註(一)東京育成園(明治四十年発行) 一六頁

註(二)右同 一五頁

註(三)右同 二四頁

註(四)右同 三〇頁

註(五)「東京育成園」(明治四十年発行)二八頁

註(六)波津女史長兄水戸堀の彫金家で一代目北仙氏

註(七)「東京育成園」(明治四十年発行)序二頁

註(八)右同 二五四頁

註(九)右同 二五九頁

註(十)右同 二六二頁

註(十一)「東京育成園」(明治四十年発行)五二頁